



名北の空の下

署長から

名古屋北労働基準監督署長 田中哲夫

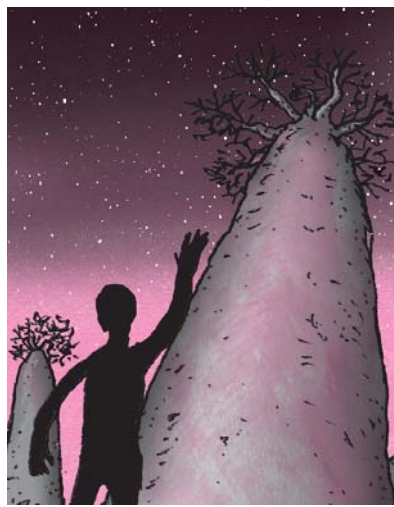
27

昨年は歌集『人定』に纏わる話を書かせていただきました。はやくも一年を経過しようとしています。あらためて今回、拙歌集と労働にかかると新作を紹介したいと思います。最初は、『人定』の中の労働の歌です。

隧道に入れば広がる闇の音 労災死者の碑のある狭間
遺族らと対話する部屋 電灯はあかるくもなく暗くもな
くて

つねながら遺族帰りし後しばし会話する者声ひそめたり

新任労働基準監督官



この歌は、昭和五十七年、岐阜・各務原トンネル建設中に発生した死亡災害から取材した歌です。被災者は東北地方の出身でした。若い遺族は、心機一転、プロ野球の巨人で中継ぎのエースとして大活躍をしました。

労基法は良心なれども事務的に説明をする秋の夕暮れ
三夕の歌を意識したもので、労基法の講習をしている時、なんとなく疎ましくなった自分の気持ちを詠み

ました。

放射能現実として降る天を軽んじて住む人がいる国
十五年前の歌ですが、現在でも共通している真理があると思います。

ふりむかず返事だけする部下の背を反対意見の表明とみる

依頼受け安全査察をする現場我が右むけば皆も右向く
悩みとはささいなるもの 星空のバオバブの木に登りて
みれば

現在でもある私の職域のささやかな場面を切り取り
ました。

それでは、「名北の空の下」で創作した新作を紹介
させていただきます。今年採用された新任監督官を詠
んだ歌です。ご一読ください。

最初の坂 田中徹尾

新人は三人なるぞと突然の慣例破りの人事がありぬ
全員が「愛知」希望と書かれている採用調書の最後三行
おもむろに署長が話を始めればさちんと立ちて聞く三
人は
起立してわが言葉聞く瘦身の若々しよ たじろぎて見る
福岡と函館、徳島 日本の中心は名古屋にあると知りたり
昼休み新人同士の会話聞く三十五年前の私だ
ぼんやりと朝登庁の舗装路を歩く新人 追い越せずいる
顔見えぬ電話相談心して聴くばかりとぞ経験を言う
労基法適用業種の細分を覚えているかと聞く朝八時
申請書すべてを鵜呑みせぬことが最初の坂を登ること
なり

イラスト・伊藤栄章